The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	連用形名詞による表現性
Author(s)	Duong, Thi Hoa
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69642
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　DUONG THI HOA　）	
論文題名	連用形名詞による表現性

論文内容の要旨

本稿は動詞連用形の名詞化について、(1)連用形の名詞化率を見直すこと、(2)連用形名詞の成立条件を明らかにすることの二つを大きな目的としている。研究の対象は日本語母語話者のレキシコンにはまだ定着していない56動詞の「不安定な連用形名詞」で、用例はブログやインターネットのサイトから採集したものである。採集した用例に対して①「語用論の観点」、②「構文の観点」、③「意味の観点」という３つの観点から分析を行った。その結果、まず56動詞の連用形のうち、55動詞連用形に名詞として使用される用例を見つけることができ、「不安定な連用形名詞」であるにも拘わらず、中には用例の数が300～400台にも上るほど、名詞化率が非常に高いということが明らかになった。そして3つの観点から分析した結果、次のような特徴が挙げられる。

まず、①語用論の観点として、発話の場について分析した結果、連用形名詞の大半は何等かの特定分野の仲間の間で使用される傾向がある。その特定分野の仲間は概ね、（1）「仲間ことば」、（2）「機械等の機能の名称」、（3）「モノづくりの工程の名称」、（4）「スポーツの動作名」という4種類に分けられる。そして、連用形名詞の成立条件については、動詞連用形が一般に名詞化しにくい一つの原因に、「動作主」や「対象物」と離れて自立的にモノ化できないことがあげられる。実際、単独では名詞化できないが、他の名詞などと結合して初めて名詞化できる連用形が多い。しかし、「特定分野の用語」として使用される場合、動詞連用形が単独でも名詞として使用される。それは「特定分野の用語」の場合、①動作主・対象物がすでに確定されている（「仲間ことば」、「機械等の機能の名称」、「モノづくりの工程の名称」）か、または②動作主・対象物より動作自体が注目される（「スポーツの動作名」）ため、連用形名詞が単独でも名詞化できるのだと考えられる。特定分野の用語としての連用形名詞は、文法上の制限により名詞化しにくいと判断される動詞連用形でも、「発話の場」によって、名詞になるために不足している特徴が補充されるため、単独で名詞化できることが明らかになった。

次に②構文の観点からは、連用形名詞と前後の文法要素との関係を分析して、最も数の多い「～＋の＋連用形名詞」という組み合わせと、「連用形名詞＋が＋形容詞・形容動詞」という構文、「連用形名詞＋を＋する/やる/行う」という構文について分析を行った。結論として、まず、「～＋の＋連用形名詞」という形は単独の連用形名詞の意味を補充し、まだ日本語母語話者のレキシコンに定着していない「不安定な連用形名詞」をより具体化し、安定化させる役割がある。また、「連用形名詞＋が＋形容詞・形容動詞」に対しては、他動詞の動詞連用形の場合と自動詞の動詞連用形に分けて分析を行った。まず、他動詞の連用形名詞の場合では、この構文は動作主の明示を避け、その動作によってもたらされた結果のみに注目させる効果がある。このような表現は、相手を評価する際に直接非難することを避けることができる。また一方で、自分のしたことに対して否定的評価を述べる時には、具体的なマイナス表示を避けることができる。つまり、「連用形名詞＋が＋形容詞・形容動詞」という構文は巧みに否定的評価を表すことができる構文になる。次に、「連用形名詞＋が＋形容詞・形容動詞」の組み合わせであるが、連用形名詞は自動詞からなるものの場合、この組み合わせは性質・属性を表す機能があるように思われる。「溶けがいい」や「温まりが早い」などは、連用形名詞を用いた慣用句と同じようなニュアンスを持ち、物事の性質・属性を表している。

一方、「連用形名詞＋する/やる/行う」という構文については、三つの場合に分けて分析を行った。その三つの場合とは(1) 連用形名詞の前に修飾部がある場合、(2) 連用形名詞を他の名詞と共に用いる場合及び(3)修飾部と共起する名詞等がなく連用形名詞だけの場合である。（１）の 「連用形名詞の前に修飾部がある場合」では、修飾部により連用形名詞が表す動作がより具体化され、「修飾部＋連用形名詞」の組み合わせが一つの複合語に相当するかあるいは一つの複合語ではカバーしきれない意味を表示することができ、連用形名詞が表す動詞が何を目的にする動作

か、どうやって行う動作かをより詳しく述べる効果がある。また、一部の「修飾部＋連用形名詞＋を＋する」では、動作を表す意味ではなく、物の性質を表す役割もある。(2)の「連用形名詞を他の名詞と共に用いる場合」では、連用形名詞は一連の作業の一つの動作を表す役割を果たす。(3)「修飾部と共起する名詞等がなく連用形名詞だけの場合」については、これらの用例の約 79%の連用形名詞が第 2 章で述べている「特定分野の用語」である。特定分野の用語としてすでに定着している連用形名詞であるため、そのまま「する/やる/行う」と共に用いて「～機能」「～工程」「～技」を「する/やる/行う」という意味を表すようになる。動詞の連用形をわざわざ名詞化して、また動詞（する/やる/行う）と共起させ,「連用形名詞＋する/やる/行う」という構文を使うという二重手間にする理由は、(1) より動作を具体的に描写したい場合、(2) ものの性質を表したい場合、(3) 一連の作業の一つの動作を表したい場合あるいは (4) その連用形名詞がすでに特定の分野で「～過程」「～機能」を表す用語として使用されている場合である。

③の意味の観点からは、「置き換え」という方法を用いて、連用形名詞を他の名詞と比べることで連用形名詞の特徴を３つ挙げた。それは①「曖昧さ」、②「生活のことばとしての馴染みやすさ」、そして③「時代の変化への対応の柔軟さ」である。曖昧さを有しているからこそ動作の方法、動作の加減等の解釈も読み手がそれぞれ自由に想像できるため、漢語名詞よりも使用の幅が広いのではないかと思われる。また、フォーマルな印象の漢語名詞と近代的でおしゃれな印象を有するカタカナの外来語と違って、和語である連用形名詞は馴染みやすく、日常生活を綴るブログや経験談などに好んで使われる傾向がある。また、連用形名詞は、表記が長くなりがちで、慣れるのに時間がかかりそうなカタカナの外来語と異なって、元々使い慣れている動詞からの転成であるため、時代と共に生まれてくる新機能などの名づけに使用される時にわかりやすいという利点がある。つまり、連用形名詞には柔軟さ・即戦力が備わっているのではないかと思われる。以上の性質を持っている連用形名詞だからこそ、様々な文章に使用されているのではないかと思われる。

総じて、上記３つの観点から分析した結果、連用形名詞がもつ表現性として、「曖昧さ」「性質・属性を表現する機能」「和語」という性質を持っていることが顕著となる。まず、連用形名詞の「曖昧さ」について言えば、連用形名詞（特に単独の連用形名詞）には明らかにモノ名詞やコト名詞のように一つだけの意味を表しているのではなく、むしろ、一つの側面に特化できない、ぼんやりとした意味で、動作の方法、動作の加減などの多様な側面を表しているように思われる。連用形名詞には「曖昧さ」という性質があるからこそ、否定的評価のような場合には巧妙にぼやかすことで相手を傷つけないようにするという効果が生まれる。そして、動作の方法、動作の加減等の解釈も読み手がそれぞれ自由に想像できる余地も生まれるのである。

連用形名詞による表現性について、もう一つ挙げられるのは、物事の「性質・属性を表現する機能」があるということである。具体的には、自動詞の「連用形名詞＋が＋形容詞・形容動詞」という組み合わせと、一部の「修飾部＋連用形名詞＋する」という表現にはこのような効果が見られる。もともと動詞連用形という動詞由来のものが名詞に転成したことにより、なぜ、元来形容詞・形容動詞が担うべき性質・属性を表現するという機能を持つようになるのだろうか。動詞連用形の名詞化については、動詞そのものに関する定義や性質、名詞に関する定義や性質と関連付けながらの分析がこれまでの主流であったが、今後は、動詞、名詞にとどまらず、「表現性」「表現する力」を視野に入れることで、明らかにしていかなければならない。

最後に、「連用形名詞による表現性」について言えば、「和語」であるという性質を見逃すわけにはいかない。採集した用例をみると、ほとんどが趣味や毎日のちょっとした出来事、観光施設のレビュー等、日常生活に密接したテーマが多くみられる。このような文章には連用形名詞がとても馴染んでいるように見られ、どこか庶民的で親しみを感じさせる印象を受ける。つまり、連用形名詞には和語から醸し出される親近感や分かりやすさ、柔らかさ、時には素朴さが備わっていることから、時代遅れどころか時代と共にどんどん新たな場面に使用されていくように思われる。

本稿の結論として強調されるべき点は、まず、動詞の連用形の名詞化率は実は非常に高いということが挙げられる。 そして、連用形名詞は「曖昧さ」「性質・属性を表現する機能」「和語」という性質を持っていることである。これらの３つの性質については、今後も引き続き様々な観点から研究を深めていかなければならない。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　DUONG THI HOA　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	三原　育子
	副 査　教授	岸田　泰浩
	副 査　教授	今井　忍
	副 査　准教授	小森　万里
	副 査　准教授	山川　太

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語の動詞の連用形が文中で名詞相当として用いられる言語現象について論じたものである。通説では、動詞の連用形はすべてが名詞相当になれるわけではなく、「帰り」「遊び」などのように日本語母語話者にとって一般の名詞として認知されるものはせいぜい4割程度であり、残りの大半が「食べ」「住み」などのように、少なくとも単独では名詞として用いることは認めがたいものであるとされてきた。しかし、筆者はこの常識を真っ向から覆し、ある環境さえ整っていれば、どのような動詞の連用形でも名詞相当として文中で使用される可能性があり、実際、目を見張るほどの多くの実例を挙げることでそれを実証した。

これまでの研究では、動詞そのものの類型や意味素性という観点から名詞になりやすいか否かが検討されることが多く、「食べ」のような日本語母語話者のレキシコンに定着していない「不安定な連用形名詞」の使用は、誤用か一過性の例外であると考えられてきた。しかし、筆者は実際の「発話の場」に注目し、「不安定な連用形名詞」は「特定分野の用語」としてむしろ積極的に使用されていることを示し、それと共に、「特定分野」であるとなぜ「不安定な連用形名詞」が使用されやすくなるのかについて、語用論的な観点から詳細に論じている。さらに、当該の連用形名詞に代替される一般名詞（類義語）が存在するにもかかわらず、なぜ「不安定な連用形名詞」が使用されるのかについては、構文の観点からも解明を試みており、結果として、いわゆる様態述語文という文型の中で使用される傾向があることを明らかにしている。

本論文において最も評価される点は、実証性である。グーグル検索エンジンにより収集した実例は膨大な数に上り、率直に言えば、これほどまでに「不安定な連用形名詞」が、言わば安定的に使用されているという言語事実にはまず驚かされた。そして、それらが使用される文脈や社会背景を丁寧に読み解くことにより、「不安定な連用形名詞」が使用される傾向を一般化することに成功している点は高く評価できる。

さらに、構文の観点から行った連用形名詞の位置付けに関する考察も特に評価できる点である。類似した意味をもつ他の語と比較することにより、連用形名詞の存在価値そのものに繋がる指摘がなされていることや、いわゆる「評価」を表す様態述語文の主語（ガ格）に連用形名詞が多用されるという指摘は、大変興味深いものであり、日本語によるコミュニケーションのあり方を考えるうえでも示唆を与えるものとなっている。

本論文は全体にわたって論旨が明快で、丁寧な記述が施されている。連用形名詞に関して、意味的、統語的、語用論的というように、多角的に考察を挑んだものは他に例を見ない。「不安定な連用形名詞」の議論に集中するあまりに、通常よく用いられる一般の連用形名詞の類への積極的な言及がなかったことが唯一悔やまれる点ではあるが、本論文は、非日本語母語話者ならではの視点が随所で生かされた論考となっており、所期の目的は十分に達成されたものとなっている。

上記をもって本審査委員会では、本論文が博士（日本語・日本文化）の学位を授与するにふさわしい水準に達しているものと判断し、審査委員の総意により合格と結論づけた。